慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	質的社会学としての生活史研究
Sub Title	Life history studies as qualitative sociology
Author	有末, 賢(Arisue, Ken)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1992
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.65, No.1 (1992. 1) ,p.259- 285
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	十時嚴周教授退職記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19920128-0259

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

質的社会学としての生活史研究

有末賢

一　序――質的データ・質的調査・質的分析――
二　生活史研究のジレンマ
三　生活史資料の分類と性格
四　関係性としての生活史調査
五　質的データの比較分析
六　結　語

一　序――質的データ・質的調査・質的分析――

「生活史研究」(life history studies) については、今までも筆者はいくつかの論稿を発表してきているが、[1]「質的社会学」(Qualitative Sociology) ということについては、本稿で初めて考察していくテーマである。この「質的社会学」[2]というテーマに結びついてきたのは、社会調査論における、量的調査と質的調査、統計的方法と事例的方法の対比の問

題であり、実際の社会学研究において「調査」と言えば、量的調査、統計的方法を思い浮かべることが多いという事実に基づいている。

社会学の歴史的展開と全体構造との関係は、もちろん壮大なテーマであって、本稿での守備範囲を逸脱するものではあるが、理論研究から実証研究に結びつけようと「生活史」という、個別具体的な研究に着目してきた筆者にとって、ここで再度「社会学の構造」に眼を向けてみたい。筆者が修士論文で「批判的社会学序説」を書いた際に、各章のつながりを示す意味で、図1のような相互連関図を書いたことがある。[3] この場合には、社会学の三角錐構造として、理論—学説史—認識論—方法論の相互連関を図示したものであった。つまり、社会学理論に焦点をあてていく場合にも、学説史、認識論、方法論の視角を相互補完的にもっていなければならないということである。当時の筆者の関心からは、批判的社会学の理論的関心から、学説史上での古典理論の再考や認識論における現象学の視点、そして科学方法論におけるT・クーンのパラダイム論などを中心にとりあげた。

しかし、その後、都市や地域社会をフィールドとして実証研究に入っていくに従って、「社会調査」という課題も大きな比重を占めるようになってきた。そこで、図2のような調査の視点も含めた社会学の構造連関図を考えたわけである。社会調査においても、社会調査史、調査の認識論、調査の方法論など相互に関連する構造を持っているものと考えられる。社会学の理論研究においては、学説史はむろんのこと、方法論、認識論への配慮も当然払われていることが多いが、社会調査論においては、まだ「技法」に片寄りがちな傾向が根強いと言える。調査を理論と結びつける方向での方法論の検討において、実証主義に結びつく、仮説演繹法や観察帰納法については多くの社会調査が論じているところであるが、質的調査法に結びつく意味解釈法の方法論については余り議論されてきていない。[4] まして、調査の認識論や学説史と関係づけられる社会調査史の系譜などについては、ほとんど省みられてこなかったと言えよう。

例えば、社会調査史においては非常に重要な「社会踏査」(social survey) の伝統や社会事業史、家計調査の系譜などが社会学史の中に正統に位置づけられていなかったり、生活史調査に関しても、シカゴ学派などの学説に位置づけられることはあっても、その認識論や方法論に至るまで詳細に検討されてはこなかったのである。[5] 従来の社会調査、特に戦後の行動科学を主体とした世論調査、量的調査の隆盛の中では、質的調査の系譜やその方法論、認識論の検討まではなされてこなかった。

そこで、本稿の目的は、質的社会学としての生活史研究というテーマに沿って、ライフ・ヒストリー研究を社会学研究の一環として位置づけてみたい。ここで、質的社会学と称している内容は、質的データ論、質的調査論、そして質的分析論の三つを含むものである。井腰圭介は、「なぜ「質的」データが必要なのか—見田・安田論争再考」[6] の中

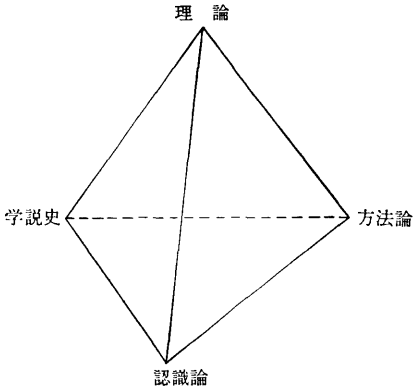


図1　社会学の三角錐構造

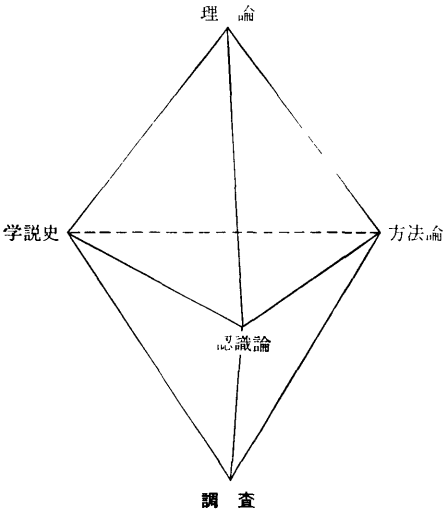


図2　理論—調査の構造連関図

で、見田・安田論争の論点の関係や争点の配置、争点の磁場としての潜在的論点など詳しく論じている。〈見田・安田論争〉とは、一九六五年の『社会学評論』（第一五巻四号・七九―九一）に見田宗介が発表した「『質的』なデータ分析の方法論的な諸問題」と題する論文に対し、一九七〇年の『社会学評論』（第二一巻一号・七八―八五）誌上で安田三郎が「〈研究ノート〉質的データの分析と数量的分析―見田論文へのコメント―」と題して行った批判と、更に、それに対する『付記』という形で、安田の「研究ノート」に対して書かれた見田の応答を指している。この論争は、充分な展開がなされたわけではなかったが、井腰によれば、〈認識手段〉と〈認識目標〉との関係、すなわち経験科学的研究過程の全てを通して、「『質的』データは何故必要なのか」を明確に問うていくべきであった[7]、と問題提起がなされている。

ここで、〈見田・安田論争〉全体の位置づけを論じていくことは差し控えたいが、先の井腰論文にも提起されている通り、「質的なデータ（=Qualitative data）」「質的な分析（=Qualitative analysis）」「質的な命題（=Qualitatively analyzed qualitative data）」などをそれぞれ、別なものとして用語表現を改めていかなければならないものと考えられる。ここでは、井腰の「なぜ「質的」データが必要なのか」という問いかけを受けながら、質的社会学としての生活史研究の意義を、質的なデータの問題（第三節）、質的な調査の問題（第四節）、そして質的データの比較分析の問題（第五節）に分けて見ていくことにしたい。

しかし、そうした質的社会学の構築へ向けての準備を進めていく前に、最近の生活史研究の蓄積から、批判点や限界論も含めた検討（第二節）をしておきたいと思う。筆者を含めた多くの論者たちが認めているように、「生活史研究の多様な展開[8]」がなされているわけであるが、そこには生活史研究が抱えているジレンマも内包されているのではないかと思われる。

二　生活史研究のジレンマ

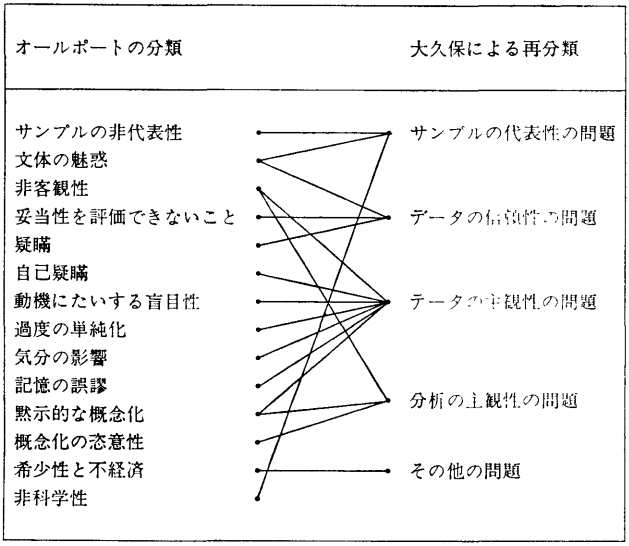
生活史研究は今、いくつかの岐路に立たされている。筆者はすでに、生活史研究に対する関心の示し方の違いに着目して、方法の軸と主題の軸という二つの軸を設定し、それらの軸の交錯によって、生活史研究における四つの視角（パースペクティヴ）を提示してきた。[9] また、ライフ・ヒストリー研究の活性化に大いに寄与した水野節夫の「生活史研究とその多様な展開」（一九八六年）においては、この〈方法の軸〉と〈主題の軸〉という発想を継承するかたちで、生活史研究が内包している〈方法としての生活史〉の活用という側面と〈主題としての生活史〉の探求・解明という側面とを区別することを示している。[10] そして、特に〈主題としての生活史〉における、事例史的な読まれ方（類型的側面）と個人生活史的な読まれ方（個人的側面）という二重の読まれ方こそが、一つの岐路と言えよう。

つまり、〈方法としての生活史〉と〈主題としての生活史〉の岐路があり、そして、〈主題としての生活史〉の中で、事例史的な読まれ方（類型的側面）と個人生活史的な読まれ方（個人的側面）の二つに分かれていく、というわけである。しかし、このような岐路だけでなく、現在の生活史研究には、いくつかのジレンマが内包されているように思われる。

第一のジレンマは、「代表性と個別性」の問題であろう。心理学者のオールポートは『心理科学における個人的記録の利用法』（一九四二年）[11] の中で、日記・手紙・自伝といった個人的記録を心理科学のデータとして使用することに対する一四種類もの批判を列挙し、それらをひとつひとつ検討し、反論を加えている。大久保孝治は「生活史分析の方法論的基礎」という論文において、オールポートの分類には、用語上の問題や基本的には同じ問題点を別のものであるかのように並べていたり、反対に、区別して論じなければならない問題点を同じ分類に入れてしまったりしているので、表1のような問題点の再整理を行った上で、個々の問題点について詳しく検討を加えている。[12]

その中で、生活史に代表される個人的記録分析の方法論的問題の第一は、サンプルの代表性の問題である。要する

表1　事例研究法の問題点



に、事例研究においてはサンプルの代表性が保証されておらず、したがって事例研究から得られた知見はその事例については妥当するかもしれないが、それを一般化することはできない、という批判である。

このサンプルの代表性の問題は、大久保が論じているように、統計的研究における無作為抽出の技法を事例的研究において用いても、サンプルの特性値が母集団の特性値を代表するということの意味が問題となってくるわけであり、質的データにおける事例の「典型性」の問題や多様な要因の顕在化こそが重要になってくる。したがって、代表性か典型性か、あるいは統計的一般化か事例的個別化かといったジレンマが生じてくることになる。生活史研究にとって常に、このジレンマはつきものである。大久保にしても、ライフコース研究における統計的方法と事例的方法を併用させるべきであると説いている。[13] 第一のジレンマとしての代表性と個別性について、もう一点だけ指摘しておくと、そこには、量的方法における「結果析出」の優位と質的方法における「過程把握」の重視という岐路もまた含まれていると言える。世界社会学会の分科会「伝記と社会」(Research Committee 38. Biography and Society) を中心的に組織化しているフランスのD・ベルトーは、代表性が明確でない標本をベースにした「生活史」などの質的方法には、今まで殆ど関心が払われてこなかったとして、その理由として、「仮説を生み出す過

程」と「それを検証する過程」の二つのプロセスのうち、量的方法を採用して後者の過程のみを強調してきたからではないかと述べている。[14] そして、生活史調査の持つ特色は、「仮説を生み出す過程」そのものをより詳細に、より深く、より新たな可能性を含めて再検討していく方向に活用できると主張している。その点からも、量的方法における「検証重視」「結果析出」の優位があげられるのに対して、質的方法における「過程把握」「仮説構成」の重視がうかがえるわけである。

第二のジレンマとしては、ライフ・ヒストリーとライフ・ストーリーの岐路があるのではないかと考えられる。生活史とは、直訳すればライフ・ヒストリーとなり、その意味では歴史性を重要視しているかのように考えられる。しかし、前述した「伝記と社会」の機関誌名は、"Life stories/Récits de vie"であり、ここでは、ライフ・ストーリーが使われている。一般的な定義によれば、ライフ・ヒストリーは、個人の一生(人生)を個性記述的アプローチによって描いていくことをさしている。それに対して、ライフ・ストーリーは一人称の形式で書かれた記録であり、対象者の人生(の一部)を本人の口述や筆記をもとに調査者が再構成した作品のことで、対象者以外の人から得た対象者の伝記的情報や個人的ドキュメント、さまざまな公文書などのデータを加えた作品であるライフ・ヒストリーとは区別されている。つまり、ライフ・ヒストリーにおいては、個人の生活史であり、個性を表出していることが特徴ではあるが、しかし、事実にもとづいた歴史性がやはり基調になっている。ところが、ライフ・ストーリーでは、個人が自分自身の人生を〈物語る〉ことが重要であって、事実であるかどうかもさることながら、当人の主観性にどのように刻印され、どのように〈物語られる〉かということが最大の関心事となるわけである。

ここに研究者にとってのジレンマも生じてこよう。歴史学的素養のもとで社会史的関心から生活史を見ていくならば、例え口述の生活史であっても厳密な意味での「資料批判」が要求される。いつ、誰が、誰に対して、どういう質問に応じて、〈語られた〉ライフ・ヒストリーであるのか、その点は基礎的な注意事項である。また、対象者(話者)の

主観性の世界に肉迫しようとしている研究者であれば、ストーリーの構成に重点を置きながら、語られている事の事実性よりも、感動を呼ぶ「真実」として再構成していくかもしれない。

第三のジレンマも、この第二のジレンマと関連しているものである。生活史研究は個人中心的アプローチをとるものであるが、その「個人」が誰であるのかという点は研究者の自由裁量に委ねられている。生活史という名称においては、「名もない庶民」「歴史上に名を残すような人ではない人」というような暗黙の前提があるようにも考えられるが、一方で「伝記」(Biography) の場合には、いわゆる「有名人」を対象とする傾向がある。もちろん、「伝記」であっても、その人の知られざる過去を掘り起こし、多面的な人間像を描き出そうとする方向においては、生活史研究と基本的には変わらないスタンスをとっている。しかし、対象者と研究者との間の距離の置き方においては微妙に異なってくる面もあるかもしれない。生活史研究を行なう側は、社会学、文化人類学、心理学などの研究者やルポライターなどのジャーナリストであることが多いため、水野の言葉を借りれば、編集志向あるいは「黒子」としての位置を占めやすい。[15] しかし、対象者との距離の置き方は、それ自体が生活史調査の根幹にかかわる問題であり、研究者にとってはジレンマを孕んでいるのである。つまり、自らの質問や意図的な記述を避けて、できるだけ対象者個人を浮かび上がらせたいとする「黒子」的発想と、「伝記」作者としての対象者との人間的な関係、並びに調査者―被調査者間の信頼関係の維持・発展という課題である。

最後に、生活史研究の抱えている第四の岐路としては、前述した点であるが、事例史（ケース研究）か個人生活史研究かという問題があげられる。このジレンマについては、今までにも充分言われてきたことであるが、個人を社会的属性によって、その一つの事例として扱うか、あるいは個人生活史を中心として心理的葛藤や内面的転機を把握しようとするか、という点である。例えば、松本通晴らの関西の社会学研究者を中心とした庶民生活史研究会による『同時代人の生活史』（一九八九年）[16] は、開拓農民、野鍛冶、鉱山労働者、失対日雇労働者、地方政治家などの職業という

社会的属性や出身地、居住地などの属性にも注目しながら、生活史を描いている。おそらく、それぞれの研究者にとっては、対象者を一つの事例研究として位置づけている場合が多いものと考えられる。その意味では、社会学的な生活史研究の場合、職業・階層的視点や家族・親族研究の視点や社会問題あるいは社会運動の観点など、それぞれの個別社会学における事例的方法として考えられる場合もある。しかし、中野卓の『口述の生活史』（一九七七年）[17]の場合のように、最初は公害問題と地域住民生活の変化という個別社会学のテーマから入って、その事例研究が個人生活史研究へと向かっていく場合もある。それによって、個人の内面把握や主観的世界の理解へと向かっていく場合もある。

このように、生活史研究は今、さまざまな岐路にさしかかっている。これらのジレンマを明識化しながら、質的社会学としての生活史研究を目ざして、次に質的データ論、質的調査論、質的比較分析論へと展開していくことにしよう。

三　生活史資料の分類と性格

質的データとしての生活史資料を考えていく場合に、筆者は以前に、ライフ・ストーリーとライフ・ドキュメントを区別して分類してみた。その際、個人のライフ・ヒストリーにおける「主観的リアリティの構成の相違」という観点から、敢えて生活史の調査・資料・研究・作品などを一貫して、個人のライフ・ヒストリーをその個人の主観的世界に可能な限り接近して抽出していく作業としてとらえたわけである。[18]

そこで使われた暫定的な定義によると、ライフ・ストーリーとは、個人の一生に近い、ある一定の時間軸上の幅を持って、何十年か、場合によっては半世紀から一世紀の時間を経由して再現される生活史をさしている。それに対して、ライフ・ドキュメントとは、個人、個人が日々生活している時間軸上で絶えず起こっている「生の反省」と「生の記録」であり、その個人にとって、少なくともその時点においては「意味のある記録」として位置づけられている

ものである。

ライフ・ストーリーとライフ・ドキュメントとは相互補完的関係があるが、前稿においては、ライフ・ストーリー的主観性とライフ・ドキュメント的主観性とをいくつかのポイントに分けて比較している。それらをまとめてみると、表2のようになる。これらについては繰り返さないが、大山信義によると「ライフ・ストーリーや反省的生活史はストーリーであるとともに、口述／記述されたドキュメントでもあるから、日記や書簡や写真のような生活史の索引のみを「ドキュメント」というのは不適切と思われる。」[19]と批判している。そして、大山は、〈反省的生活史〉と〈索引的生活史〉という「生活史の二つの様式」を区別して提唱している。

反省的生活史とは、「ある生者の人生の一時期まで、あるいはその人のほぼ生涯にわたる体験を包摂している場合」[20]で、その特徴としては、第一にこれらは、話者／作者が生活者としての体験を、現在の時点から過去に遡及して自覚的に意味づけ、その日常実践的な脈絡に即して生活史を追構成する契機を内包している。」[21]ことである。また、「反省的生活史の第二の特徴は、生活史の口述や記述のなかで使われている発話の言葉や文字などの象徴の意味について、読者・編者・研究者などこれを解読する側でも、当の生活者の日常実践的・生活史的な脈絡から解釈することができるということである。」[22]と述べられている。

もう一つの索引的生活史の方は、「日記・日誌・書簡・手記・覚書・雑記・家計簿・写真帳などのように、個人や家族の生活史の断面を記録したもの」[23]である。これらの記録は過去遡及的というよりも、それぞれの時点で生活者の意図や感慨をこめて、現在進行形の形で刻んできた事実、つまり現在表示的な事実であるから、日常実践的・生活史的な状況との文脈が明示されていないのがふつうである。日記も書簡も写真も、日常実践的・反省的な脈絡を欠いているが、その人の生活史を構成する場合の索引（index）としての意味をもつために、〈索引的生活史〉（indexical life history）と名づけられている。

大山は、これらの「生活史の二つの様式」を表3のようにまとめるとともに、作品／資料としての生活史に対して、研究者がどうかかわっているかについても、①規範的生活史（normative life history）と②解釈的生活史（interpretative life history）に分けて考えている。また、生活史における相互作用の問題についても、表4のように、〈自己の作品〉と〈他者の作品〉に分けて、生活史を〈自律的〉に語り／記録された作品か、〈他律的〉に客観的な第三者によって作品化されたものかを分類している。[24]

これらの分類のしかたについては、細かいところで多少の異論はあるものの、大筋においては筆者が提起したライフ・ストーリー的側面とライフ・ドキュメント的側面と重なるものであると思われる。おそらく「ドキュメント」という用語の使い方や、索引的（indexical）という用語の定義にかかわる問題かとも思われるが、全体的には大山の方が、より詳細な分類と性格づけをしていると言える。

しかし、反省的か索引的か、あるいは規範的か解釈的か、そして自律的か他律的かという規準そのものが質的社会学の重点の置き方によって異なってくることがある。前述したように、日記においても、反省的なストーリーが混在している場合もあるし、口述史も立派なドキュメントとなりうる。そこで、質的データとしての生活史資料については、もう少し広い文脈の中に置いてみなければならない。次節にも関連することであるが、質的調査法としては、生活史法（life history method）だけではなく、参与観察法（participant observation）、自由面接法（non-directive interview）、実験的方法（experimental method）などがあげられる。[25] そして、量的調査でも質的調査でも同様のことであるが、資料（データ）の分類においては、現地的源泉か文献的源泉かに分かれる。そして、質的データの種類としては、言語的データか非言語的データに分類できる。量的調査、統計的方法においては、言うまでもなく数量的データというカテゴリーが入るが、質的データにおいては、言語的データが中心的なものである。

そこで、質的調査法それぞれにとっての質的データを分類したのが、表5に表わしたものである。これらを見ると、

表2　ライフ・ストーリー的主観性とライフ・ドキュメント的主観性

	ライフ・ストーリー的主観性	ライフ・ドキュメント的主観性
1.主観的リアリティの時制	過去から	現在から
2.正当化の装置	重要な意味体系の獲得	正当化しえない葛藤・矛盾
3.「重要な他者」の存在	選択可能	未解明状態
4.文字と記録	口述性の重視	資料性・客観性の重視
5.調査者(研究者)との関係	直接性の重視	間接的にも可能

表3　生活史の二つの様式

分類	時間の視界	現実構成様式	象徴解釈
反省的生活史	過去遡及的 (retrospective)	反省的 (reflexive)	日常実践的な状況 脈絡から可能 (contextual)
索引的生活史	現在表示的 (presentative)	索引的 (indexical)	曖昧／多義的 (equivocal)

表4　生活史における相互作用の形式

分類	特徴	作品化の契機	事例	相互作用の形式
自己の作品	主観性・自律性	1）当人が語る	口述生活史	自己と他者
		2）当人が書く	書簡	自己と他者
			自伝・日記	主我と客我
		3）当人に依頼	自伝・回想録	主我と客我
他者の作品	客観性・他律性	4）他人が語る	回想	他者と他者
		5）他人が書く	伝記・学術資料	他者と他者
		6）他人に依頼	回想録・伝記	他者と他者

表5　質的データの分類と性格

質的データの分類 ＼ 質的調査法	現地的源泉		文献的源泉
	言語的データ	非言語的データ	言語的データ
生活史法	口述史(oral history)	アルバム・風俗・民俗	日記・手紙・自伝
参与観察法	調査記録(field note)	写真・映像・図表	歴史的資料
自由面接法	面接(interview)	印象・記憶・深層心理	作品
実験的方法	会話(conversation),会議	テスト結果・行動観察	

生活史法、参与観察法、自由面接法などの質的調査の主要な調査法においては、現地的源泉の言語的データにその中心的な質的データが位置づけられている。実験的方法だけは、エスノメソドロジーのような質的調査において、会話などが主要なデータ源泉となるが、心理学などの実験的方法においては、非言語的データも重要になってくる。また、実験的方法は、そもそも調査方法の性格からして文献的源泉は存在しないということにとる。生活史法においては、文献的源泉としての日記・手紙・自伝等も重要なデータであり、参与観察法や自由面接法における文献的源泉の補助的役割とは対照的な関係になっている。

以上のように、質的データの分類と性格を見ていくと、さらに、言語的データ、非言語的データそれぞれにおけるメディア（媒体）の問題も見逃すことはできない。例えば現地的源泉における言語的データの場合には、口述史でも、フィールドノートでも、インタヴューでも、会話採取でも、テープレコーダーの役割は非常に重要である。非言語的データにおいては、写真や映像資料など視覚的メディアがかかわってくるし、文献的源泉においては、パーソナル・メディアやマス・メディアも介在してくるものと思われる。

メディア論としての生活史研究、質的社会学の問題は、未開拓の領域であり、調査行為とも深くかかわっている点である。[26] そこで、次に質的調査論に論点を進めていきたい。

四　関係性としての生活史調査

K・プラマーは『生活記録の社会学』（一九八三年）において、生活史調査を実施する上での、四つの基本的な問題グループを設定している。彼はこれを方法的問題のパラダイムと呼んでいるが、その四つの問題とは次のようなものである。[27]

(1)社会科学的問題
この問題は、主として、そもそも調査を行う意味はなにかという意味づけの問題を扱うものであり、社会調査における「何ゆえに？」という根源的な問いにかかわる。ここでの議論はほとんど認識論的な検討が中心になる。

(2)技術的問題
この問題は、主として、実際に調査を進めるうえでのこまごました問題と核心にかかわる問題――標本の選定、充分な面接、有効性の評価といった問題を取り扱う。本質的には、社会問題における「いかに？」という問いにかかわる。

(3)倫理的・政治的問題
この問題は技術的問題や社会科学的問題の外側に広がる問題を扱う。こうした調査を行うことの政治的な意味づけや、調査を進めるうえで生じてくる倫理的なジレンマなどの問題である。

(4)個人的な問題
この問題は、調査が調査者の個人生活に及ぼす影響と、調査者の個人生活が調査に及ぼす影響という二重の影響の問題を扱う。

そして、プラマーは、こうした四つの問題は、いずれも調査の開始時点、進行途中、終了時点という動態のなかで把握する必要があるとして、方法論からみた調査の全体像を表6のように示している。

しかし、実際の生活史調査の場面を考えてみると、(1)の社会科学的問題における認識論的な検討は、調査者と被調査者との関係の中にも入ってくるし、そこには、調査の倫理的問題も、また調査者の個人的な問題、さらには被調査者の個人的な問題も加わってくる。したがって、口述の生活史調査や面接調査に際しては、調査の技術的問題が、そのまま、認識論的問題や倫理的、個人的問題につながっているものと考えられるのである。そこで、関係性としての生活史調査について、認識論的モデルを中心として考察してみたい。

表3にも示したように、大山信義は、反省的生活史における象徴解釈は、日常実践的・生活史的な脈絡から解釈することが可能であるとしている。彼は、「反省的生活史におけるリアリティは、そこで用いられる発話の言語が、話

者／作者がおかれていた特定の状況と結びつくことによって構成されている。本書に収録した造船労働者の生活史が、読者にたいしてもリアリティをもつのは、すべての象徴が明らかに話者の生活史的な脈絡から発話されることによって成立しているからである。[28]」と述べている。それでは、生活史調査の場面で、象徴解釈はどのような過程で展開されるのだろうか。

E・リーチは『文化とコミュニケーション』（一九七六年）の中で、基本的に人の心の中にあるイメージとそれを概念として把握する際の結合媒体を人間のコミュニケーション事象（Communication Event）としてとり扱っている。つまり、コミュニケーション事象とは、外界の事物、他者との間に限らず、一人の人間の内部でまさに構成される事象についても言えるわけである。そして彼は、このコミュニケーション事象を、隠喩と換喩、表出的行為の所産とコード化されたメッセージの解読という二つの軸に沿って、二対コミュニケーション（Communication dyad）として、図3のような「認知の図式」を示している。[29]

筆者は、以前に、このリーチの認知図式を使って、図4のようなシンボル的コミュニケーションのモデルを示したことがある。[30] まず、Aの「意味世界」とBの「意味世界」とは、感覚イメージYを通じて、共有された意味すなわちリアリティを持たない限り、基本的には「異世界」を形成している。したがって、シンボルとしてのZ（言語及び非言語的事物）が例え同じであっても、その上層部の記号的連関だけを見ていては、コミュニケーションの核心に触れることはできない。つまり、同じ言語を用いても、意味世界として成り立つ「文化とコミュニケーション」は異なったものであるかもしれないし、また、異文化の理解がまず言語を通して学ぶにしても、それは未だ記号的連関の段階にとどまっている状態だとも言えよう。

図4でもう一つ重要な事は、シンボルZを通しての「関係性の場」が共時態としてそこに存在している点である。例えば、象徴体系（シンボルシステム）として見ることのできる、通過儀礼や祭という「関係性の場」でもって、シンボルが意味している

表6　方法論的問題を分析するためのパラダイム

	調　査　の　段　階		
	調　査　前	調　査　中	調査の終わり
(1)　社会科学的問題			
(2)　技術的，実際的問題			
(3)　倫理的，政治的問題			
(4)　個人的問題			

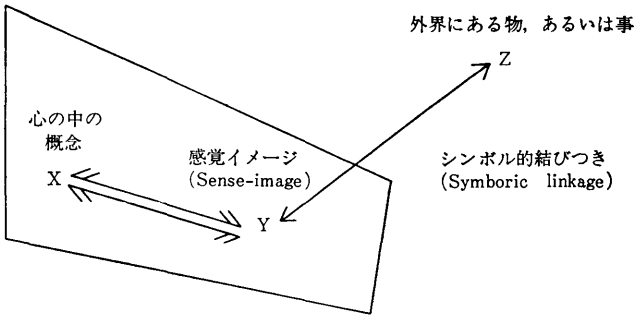


図3　リーチの「認知の図式」

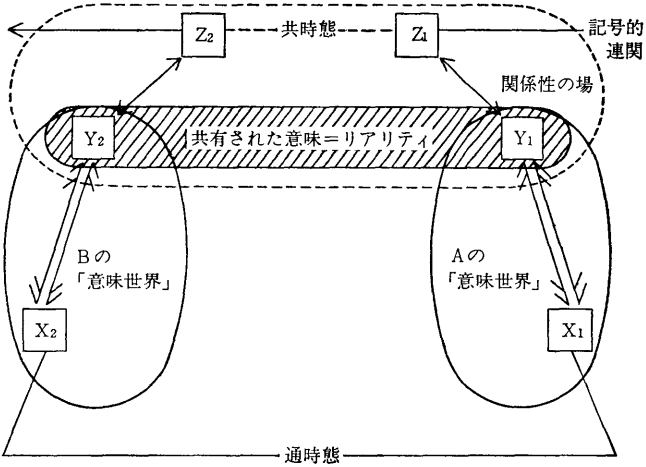


図4　シンボル的コミュニケーション

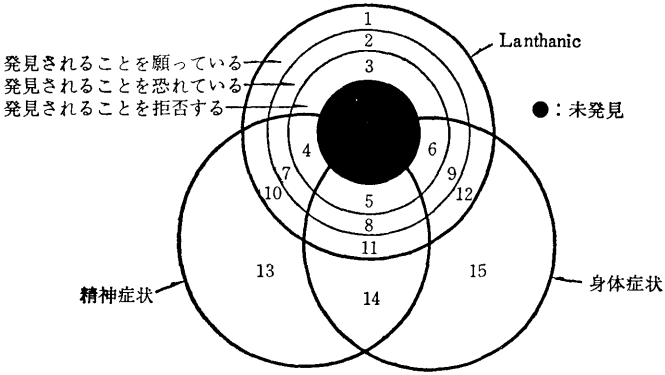


図5　精神疾患のスペクトルム

コミュニケーション的要素も通時態を通しての共時態、つまり「構造」という観点から見ているわけである。

ここで、「関係性の場」を生活史調査の場として考えてみよう。Aの「意味世界」とBの「意味世界」は、それぞれ調査者（研究者）の意味世界と対象者（被調査者）の意味世界と置き換えることができる。記号的連関は、言語的コミュニケーションを中心とした口述史や面接の場面を想定することができる。しかし、重要な点は、共有された意味＝リアリティを両者が共に持っているという点である。この場合のリアリティの共有とは、調査者（研究者）が、対象者の意味世界に興味を持っており、ライフ・ヒストリーを聞きたいという基本的な調査の意図にかかわっている。しかし、それだけでリアリティが共有されるわけではなく、非言語的コミュニケーションとしての態度、しぐさ、視線なども重要な役割を果たす。また、客観的条件としての、知識・情報の共有や同世代、同郷、同時代人としての共同体験なども通時態としてかかわってくるものと考えられる。

しかし、社会科学的な生活史調査の場合には、あくまでも調査者（研究者）は、対象者の意味世界に沿って、関係性の場を築いていくことになるが、臨床心理的なケース・ヒストリー（事例史）の場合などには、関係性の場のモデルが多少異なってくる。精神科医の土居健郎は『方法としての面接—臨床家のために—』（一九七七年）[31]において、「理解とは関係が見えて来ること」や「『ストーリー』を読む」、「劇としての面接」など興味深い指摘を数多くしているが、付論の「臨床的研究の方法論」の中で、フェインステイン（Alvan R. Feinstein）の『臨床的判断』（Clinical Judgment）を紹介しながら、図5のような精神疾患のスペクトルムを表わしている。この図の中で、Lanthanic とあるのは、フェインステインの造語で、ギリシャ語の「気付かれないでいる」という意味の動詞からつくられた形容詞で、一応「隠れている」部分と訳されうる。

そこで、土居による説明は次のようになされている。「1、2、3群は、偶然の機会に、例えば心理テストによって、何らかの病理が疑われても、いわゆる臨床的症状は呈していないものである。4、5、6群は明らかに精神症

状・身体症状を単独にか合併して有するが、精神疾患を持つ者として扱われることを頑固に抵抗するものである。7、8、9群は、症状を有することは4、5、6群と同じであるが、精神疾患を持つ者として扱われることにそれほど抵抗はせず、ただそのことに恐怖を抱いているものである。10、11、12群はこれに反して発見されたことで内心安堵するものをあらわしている。13、14、15群は自ら症状を訴えて、医者のもとを訪れる患者たちである。[32]」

質的調査としての生活史調査を考えていく場合に、このような臨床の場面と全く無関係ではありえない。ライフ・ヒストリーの中にも、「発見されることを願っている」「発見されることを恐れている」「発見されることを拒否する」といったレベルが存在するだろうし、「語り得る事」と「語り得ない事」との相克もあるだろう。[33] また、時間の経過や調査者と被調査者とのリアリティの共有の程度によって、「語り得ない事」が、「語り得る事」に変化することもあろうし、またその逆もありえる。もちろん、未発見に終わる対象者の内面世界も存在している。そこのところは、決して「職人芸」ではないが、[34] しかし、関係性の場としての質的調査の課題が問われてくるところである。

五　質的データの比較分析

質的社会学としての生活史研究を考えていく上で、質的データ、質的調査とともに、質的分析の問題は重要な鍵となってくるものと思われる。ここでは、質的データの比較分析を中心に分析・解釈の問題を考えていきたい。まず第一に、表5に示したような「質的データの分類と性格」にもとづいたデータ同士の比較を考えてみよう。データの形式上の比較は、誰でも簡単に気付くことであるが、その細部に渡って、網羅的に比較検討しておく必要がある。調査者および研究者は、とかく「主題としての生活史」だけに眼を奪われがちで、その質的データの持っている形式的特性や限界について見落としがちになる。

例えば、生活史法による現地的源泉としての言語的データに位置づけられる口述史においては、対象者が何歳の時の口述史か、何回の調査で延べ何時間話されたことか、生活史の年月順に話されたのか、非常に詳しく話された時期は生活史の中でいつなのか、何度も繰り返し話されたことは何か、繰り返し話されているうちに話の内容に変化はなかったか、などがあげられる。これらの点は、もちろん生活史調査の段階でも、比較すべき点ではあるが[35]、ここではデータの性格として考えておきたい。また、文献的源泉としての日記についても、日記が記されている期間、年齢、一日の分量、全体の分量、また中断されていないか、日付順と記録された順番に相違はないか、日記の形式は「自由日記」形式か定形あるいは長期連用（三年または五年）形式か、毎日必ず記載されている事項があるかどうか、また日記の性格が、自己告白型、他者批判型、客観的記述型など、どのような特徴を持っているか、などに注意しておく必要があろう[36]。

第二に、質的データを質的に分析する諸方法について考えてみたい。質的データを比較していく場合には、それぞれのデータの特性と同時に、分析方法に応じた比較がなされなければならない。そこで、質的分析にかかわる諸方法をここでは広く渉猟してみることにする。第一には、事例分析があげられる。社会学的な生活史研究においては、例えば、職業・階層移動における事例（ケース）としていくつかの生活史を扱うことがある。家族社会学においても、地域社会学においてもこのようなケース分析はごく普通に行われている。しかし、多くは、量的調査、統計的分析の後に、その枠組の中で、より具体的事実を詳細に展開していくという目的から事例分析が添えられている。この他、臨床心理学や社会福祉学においても、ケース・ヒストリー（事例史）の方法が使われており、クライアントや（福祉）対象者の問題発見のために、面接によってライフ・ヒストリーを聴き取るという方法である[37]。また、経営学やビジネス研究では、一企業の経営戦略をさまざまな要因から分析していく方法をケース・メソッド（case method）と呼んでいる。これら多くの領域における事例分析から比較して分析方法の特徴を積み上げていく必要があろう。

二番目には、歴史分析をあげなければならない。「歴史分析」というと、史学方法論上の問題を印象づけることになるかもしれないが、ここでは、社会史を中心に、時間軸上の比較と考えてもよい。例えば、個人生活史上における時間軸と社会史、時代の影響なども「歴史分析」もしくは「時間分析」の中に含まれてくる。民俗学上の「一回性のない歴史」つまり「繰り返される歴史」の観点は、家、村落、共同体などの制度上にあって、通過儀礼として分析されてきたが、個人の一生のテーマからは、発達段階やライフ・コース論の観点も加わってこよう。また、時代効果、世代の概念など、いわゆる個別歴史性が個人に与える影響についても併せて考えていかなければならない点である。

第三には、内容分析を含む、いわゆるテクスト分析の方法が考えられる。これは、文学批評、哲学、記号論、文化人類学、マス・コミュニケーション研究などで応用されている分析方法で、まず文字資料、文献作品、映像資料などを「テクスト」として固定するわけである。そして、メッセージの送り手、受け手双方におけるシンボル分析、システム分析、インパクト分析などを進めていく。生活史法においては、日記分析、手紙分析などの資料を固定する際には、この方法はかなり有効であるし、口述史においても、書かれた作品が編集志向の強いものであれば、発表された生活史研究の作品を「テクスト」として、二次分析を行うこともできる。しかし、テクスト分析の場合、テクスト内での文脈には考慮が払われるが、テクスト外の非言語的データ、調査の場面などはなかなか考慮に入れられないという問題点もある。さらに、二次分析を行う場合には、調査者と分析者が異なってくるために、研究者側の二重のバイアスがかかってくることもある。

第四の質的分析の方法は、広い意味では、テクスト分析に入るものだが、特にエスノメソドロジーなどで発展してきている会話分析 (conversation analysis) である。エスノメソドロジーでは、日常生活において人々が使用している自明的な方法をある種の実験的方法を用いて発見していくというものである。例えば、会話の順番取得システムや「割り込み」(interruption)、「あいづち等の支持作業」(support works) といった会話の中の細かい規則に注目したり、カ

テゴリー化装置、背後認識と「適切な認識」などを判断していくものである。[38] 生活史法においても、会話分析の手法を取り入れて、「語り」の特質やライフ・ストーリーの構造を分析していく方向も模索されている。

最後に、第五の質的分析の方法は、深層分析を加えることができる。これは、精神分析学や臨床心理学において、すでに相当の蓄積のある分析方法であり、そういう意味では質的社会学にどのように取り入れることができるのか、課題となるところであろう。個人生活史の場合には、精神的な深層分析に直結しうる展開もあろうが、社会史的な深層分析、構造主義の分析も一種の深層分析として位置づけることができる。[39] つまり、支配的な歴史像のもとで、隠されてきた歴史の深層、あるいは社会生活の基層を明らかにしていくことも質的分析の重要な課題となろう。

以上のように、質的分析の課題は、従来の社会学では仮説演繹法、観察帰納法を中心に実証主義のラインで統計的方法を駆使してきたためか、意味解釈法の発展が立ち遅れてきたという問題がある。意味解釈法においても、M・ヴェーバー、A・シュッツ、現象学・解釈学などさまざまな伝統があるが、具体的データに即した分析方法の発展が期待されるところである。

六　結　語

生活史研究はその多様な展開の中で、個別学問領域（discipline）を大きく越えていく傾向を持っている。それは、「人間の全体性」の回復や人間の個性中心的アプローチを採っていく以上、当然の結果であり、現代科学の再編過程からも注目される領域の一つである。例えば、生活史資料や生活史研究に対しては、家族社会学や職業社会学のライフ・コース論やキャリア発達論からの関心も高まっているし、一方で社会史や生活研究の系譜からも興味を持たれている。また、伝記や文学的真理の題材としても、あるいは単なる読者の側の「人生教訓」を含んだ「読みもの」とし

表7　生活記録改変（コンタミネーション）の連続体モデル

1	2	3	4	5
対象者の「純粋な説明」（生の材料）				社会学者の「純粋な説明」
手を加えない日記，自然なやりとりの手紙，自伝，書き手自身が記した書きもの・手記，社会学者自身の体験など	編集を加えた生活史記録	系統的・主題的分析	副次資料による検証（例示）	社会学的理論

ても楽しまれている。

しかし、その一方で、これらの多様性は、とかく「場当たり」的で、その場限りのものと見られやすい。つまり、量的データは連続しているのに、質的データは根本的に非連続であるということである。この点について、プラマーは表7のような、「生活記録の改変過程（contamination）」の連続体モデルを提起している。彼は、「この生活史記録を解釈するという問題を解明するために、社会学的生活史における二人の主要な解釈者、つまり研究対象と社会学者の位置を定めるための連続体モデルを想定してみるとよい。この両者は、いずれも自分が前提とするものを状況のなかに持ち込む。社会学者は、「哲学的な」理論や概念を用いる傾向があり、他方、対象者は自分が「世間的に当り前と思っている見方」のうえに立つ傾向がある。したがって分析という問題は、対象者が理解していることに対して、社会学者がどの程度まで自らの「理論」を押しつけていくのか、あるいは、どの程度まで対象者自身による世界の理性的な組立てが、その純粋形態において把握され、理解されるのか、という問題に置き換えられる。」[40]と述べている。

この連続体モデルは、社会学者が自らの分析装置を対象者に押しつけていく程度、ないしは対象者自身の世界が「改変」される程度を表しているが、まさに、質的データの分析における非連続を打破しようとする試みの

一つとして評価される。質的社会学としての生活史研究は、一方で多様性を含みながら、もう一方で、それぞれのデータ、調査方法、分析と解釈を相対化させながら、比較していく方向へと模索されなければならないだろう。

(1) 拙稿「生活史研究の視角」『慶應義塾創立一二五年記念論文集法学部政治学関係』所収、一九八三年、三四五―三六六頁。拙稿「生活研究とライフ・ヒストリー―生活史研究から―」川添登編『生活学へのアプローチ』ドメス出版、一九八四年、四九―六八頁。拙稿「生活史と「生の記録」研究―ライフ・ヒストリーの解釈をめぐって―」『法学研究』第六一巻第一号、一九八八年一月、二三三―二六二頁、等参照。

(2) Schwartz, Howard and Jacobs, Jerry, *Qualitative Sociology*, (New York: The Free Press, 1979), Bogdan, Robert and Taylor, Steven J., *Introduction to Qualitative Research Methods*, (New York: John Willey & Sons. 1975) 等参照。

(3) 拙稿「批判的社会学序説」（未発表・修士論文）一七頁。

(4) 観察帰納法、仮説演繹法、意味解釈法についての「メソドロジーの三角形」については、今田高俊『自己組織性―社会理論の復活―』創文社、一九八六年、に詳しい。

(5) 日本社会調査史については、川合隆男編『近代日本社会調査史(I)』慶應通信、一九八九年、江口英一編『日本社会調査の水脈』法律文化社・一九九〇年、等の労作が最近発行されている。他に、中川清「《書評論文》近代日本一〇〇年の自己認識を振り返る」『三田学会雑誌』八三巻三号、一九九〇年一〇月、二八三―二九六頁。川合隆男「日本社会学の最近の動向と反省」『法学研究』第六三巻第三号、一九九〇年三月、一―四二頁、等も参照。

(6) 井腰圭介「なぜ「質的」データが必要なのか―見田・安田論争再考」『上智大学　社会学論集』一二号、一九八八年三月、二一―四二頁。なお、井腰圭介「質的データ分析における推論と解釈の差異―生活史分析の多様性とその意味―」日本社会学会第六三回大会・一般研究報告（ライフコース研究の理論と方法）でのレジュメも参考にした。

(7) 同右、三五―四〇頁。

(8) 水野節夫「生活史研究とその多様な展開」宮島喬編『社会学の歴史的展開』サイエンス社、一九八六年、一四九―二〇八頁、参照。

(9) 拙稿「生活史研究の視角」前掲、三五三頁参照。四つの視角とは、㈠生活史事例の類型化（生活研究）、㈡質的調査法と「個人」研究（社会調査論）、㈢主観的現実の変更過程（現象学的社会学）、㈣生活史と社会史（社会変動論）のことである。

その意味では、本稿は、㈡の社会調査論に主眼を置いている。

(10) 水野節夫「生活史研究とその多様な展開」前掲、一九三頁。

(11) Allport G. W. *The Use of Personal Document in Psychological Science* 1942（大場安則訳『心理科学における個人的記録の利用法』培風館、一九七〇年）。

(12) 大久保孝治「生活史分析の方法論的基礎」『社会科学討究』第三四巻第一号、一九八八年、一七五頁。

(13) 同右、一六八頁。大久保は、ライフコース研究における統計的方法と事例的方法の性格の相違を表①にまとめている。

表① 統計的方法と事例研究法の比較

	統計的方法	事例研究法
分析の対象	集団	個人
サンプル数	多数	少数
データの性質	量的	質的
同時に分析できる要因数	少数	多数
分析の論理	客観的	主観的

(14) Bertaux, Daniel., Oral History Approaches to an International Social Movement. in Øyen Else (ed.). *Comparative Methodology: Theory and Practice in International Social Research*, SAGE Studies in International Sociology 40 (London: SAGE Publications 1990) p 167.

(15) 水野節夫、前掲、一七〇頁。

(16) 庶民生活史研究会編『同時代の生活史』未来社、一九八九年。

(17) 中野卓編著『口述の生活史―或る女の愛と呪いの日本近代―』御茶の水書房、一九七七年。

(18) 拙稿「生活史と「生の記録」研究―ライフ・ヒストリーの解釈をめぐって―」前掲、二四〇頁。

(19) 大山信義編著『船の職場史―造船労働者の生活史と労使関係―』御茶の水書房、一九八八年、三三一頁。大山は本書を第

Ⅰ部ある船具工の生活史、第Ⅱ部ある仕上工の生活史、第Ⅲ部解説論文という形でまとめている。解説論文には、「生活史と産業労働の社会学—視座の転換のために—」と「反省理論としての生活史—パラダイム論の立場から—」の二論文が収められている。本稿では、主に前者の方を中心に考察している。

(20) 同右、三二九頁。
(21) 同右、三三〇頁。
(22) 同右、三三〇頁。
(23) 同右、三三〇頁。
(24) 同右、三三六—三四三頁。
(25) Easthope, Gary., *History of Social Research Methods* Longman. 1974 (川合隆男・霜野寿亮監訳『社会調査方法史』慶應通信・一九八二年) によると、参与観察法と生活史法を一つのセットにしており、踏査法 (survey) と実験的方法、比較研究法などを別の章で解説している。質的調査法としての分類は筆者の見解による。
(26) 阿南透「写真のフォークロア—近代の民俗—」『日本民俗学』一七五号・一九八八年八月、六九—九五頁。岩井洋「身体・記憶・場所」『上智大学 社会学論集』一一号、一九八六年。三三—五〇頁。
(27) Plummer, Ken., Documents of Life: An Introduction to the Problems and Literature of a Humanistic Method., (London George Allen & Unwin: 1983) p. 84 (原田勝弘・川合隆男・下田平裕身監訳『生活記録の社会学—方法としての生活史研究案内—』光生館・一九九一年) 一二五—六頁参照。
(28) 大山信義、前掲書、三三〇頁。
(29) Leach, Edmund., *Culture and Communication.*, Cambridge University Press., 1976, p. 19.
(30) 拙稿「批判的社会学の知識構造—パラダイム概念を軸として—」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第二〇号、一九八〇年三月、四四頁。
(31) 土居健郎『方法としての面接—臨床家のために—』医学書院、一九七七年。
(32) 同右、一三〇—一三一頁。
(33) 松本健一『仮説の物語り—いかに事実を発見するか—』新潮社・一九九〇年、参照。
(34) 大久保孝治「生活史分析の方法論的基礎」前掲、において、中野卓の「無作為主義」について、次のように批判している。「無作為主義」はいうなれば社会調査法における「奥義」のようなものである。……『口述の生活史』は中野卓という個性あ

ふれる研究者と内海松代という希有のインフォーマントとの出会いの所産であるが、そのためにかえって生活史法というものを芸術的な、あるいは神秘的なものにしてしまってはいないだろうか。」(一七〇頁)。

(35) Plummer, Ken, Ibid. p. 103. (邦訳、一五三頁) には、生活史調査において、バイアスが生じる領域のチェック・リストを(1)生活史の情報提供者、(2)社会科学者—調査者、(3)相互作用、に分けて提出している。

(36) 中野卓編・著『中学生のみた昭和十年代』新曜社・一九八九年、は日記資料の著者が中学生時代(一五歳一一か月～一七歳三か月)の中野卓であり、編者は、現在(八九年当時六九歳)の中野卓であるというものである。データの質的分析にとって興味深い資料であると思われる。

(37) 浅賀ふさ『ケースヒストリーの要点—クライエント理解の手引き—』川島書店、一九七一年。

(38) Sacks Harvey, An Initial Investigation of the Usability of Conversational Data for Doing Sociology, (G・サーサス／H・ガーフィンケル／H・サックス／E・シェグロフ(北澤裕・西阪仰訳)『日常性の解剖学』マルジュ社・一九八九年、九三—一七三頁。

(39) 佐藤健二「社会分析の方法としての『新しい歴史』」『社会科学紀要』三三輯、東京大学教養学部、一九八四年三月、一八九—二一七頁。

(40) Plummer, Ken, Ibid. p. 113. (邦訳、一六六頁)